

手術総数916例、内訳では子宮頸癌 77、子宮体癌 14、
 卵巣癌24、子宮筋腫454、卵巣嚢腫102、外妊41、子宮脱
 29、帝切88、外陰癌 2、エンドメトリオーシス15、他70
 となっている。これを年度別、術式等について検討し
 た。

14. 絨毛性疾患の統計

遠藤信夫、加藤孝子、小林治
 大森景文 (千大)

昭和49年より過去5年間に当教室に登録された絨毛性
 疾患は奇胎1,031例、破奇37例、絨毛癌28例、区分不明
 71例であった。奇胎を先行妊娠とする続発絨毛性疾患
 は、104例(10.1%)であり、そのうち絨毛癌は4例で
 あった。これらは奇胎後フォローアップによる続発症の
 早期発見、早期治療により絨毛癌の1例を除き寛解が得
 られた。化学療法を中心とした効果的治療に加え、奇胎
 後管理方式の徹底が重要であると思われた。

15. 子宮内膜癌の統計

河西十九三 (千大)

当教室では1975年より内膜外来を設け子宮内膜癌の早
 期診断、早期治療に努めている。4年間の内膜癌総数は
 36例、その年度別内訳は1975年6例、1976年8例、1977
 年8例、1978年14例で、全子宮癌に占める割合は、それ
 ぞれ6.97%、12.31%、12.31%、15.05%と上昇傾向に
 ある。臨床期別ではⅠ期22例、Ⅱ期7例、Ⅲ期3例、Ⅳ
 期4例である。治療方針の原則はⅠ期 G₁ 単剔、Ⅰ期
 G₂ G₃ 単剔+リンパ廓清、Ⅱ期広汎、Ⅲ期単剔又は広
 汎+放射または化学療法、Ⅳ期は個別的治療としてい
 る。

16. 妊娠後半期 エストリオールクリアランス 測定 の 意義

小林 亘 (塩谷病院)

胎児・胎盤機能検査は、めざましく進歩し、簡易法も
 開発されましたが、今回中毒症例53例におけるエストリ
 オールクリアランスとクレアチニンクリアランス測定に
 おいて、より鮮明に胎盤機能をとらえたので報告し
 ます。

17. 新しい免疫化学的測定法の模索

— α_1 -フェトプロテイン (AFP) の測定—

城武 昇一 (千大)
 L. H. ボンナカー (ヘキスト研)

〔目的〕 yolk sac tumor や hepatitis の診断に AFP
 の測定は、有力な手段である。今日では、RIA や EIA
 法 (検出限界約10ng/ml) により定量されているが、正
 常値の極めて小さい事から早期診断予後には、より感度
 の高い測定法が望まれる。〔実験〕演者は、抗体と ma-
 rker との間に spacer を導入し、抗体価の低下を防ぐ
 事を計った。〔結果〕この方法では0.5ng/ml まで測定で
 き、上記目的に充分かなう事が示唆される。

18. 子宮外妊娠時の線溶系測定の臨床的意義

小林 亘 (塩谷病院)

子宮外妊娠8例における腹腔内血液と静脈血におい
 て、それぞれ、血小板数、赤沈、フィブリノーゲン値、
 F.D.P. 値をそれぞれ比較して、子宮外妊娠を局所 D.
 I.C. という見方をし、全身性 D.I.C. への時間的ずれ
 を、データで確認しえしたので報告しました。

19. 下腹部腫瘍診断における HSG 撮影の意義につ いて

檜垣康二、望月 博、高野 昇 (国立横浜東)

腹腔鏡検査超音波診断あるいは CT によって下腹部
 腫瘍の診断がより正確になってきた。しかしこれらの診
 断は高価な器具と熟練を必要とし、必ずしも一般化に至
 っていない。

婦人科領域で routine に行われている HSG の下腹
 部腫瘍 (117例) にみられる影像を分析し、これらの所
 見と開腹所見とを対比し、下腹部腫瘍における HSG の
 診断的意義について検討を加えた。その結果、下腹部腫
 瘍診断の補助診断法として HSG 撮影は充分意義のある
 ことを認めた。

20. ラテックス凝集法による HpL 測定法の検討

中村欽哉、仁藤章夫 (川鉄)
 加藤徳太郎 (川鉄・検査科)
 工藤 純孝 (千大)

ヒト胎盤性ラクトゲン (HpL) は胎盤機能検査法とし
 て有用であり、測定法も SRID 或いは HpL-HAIR,
 HpL-HAR 法の開発以来、簡易化されて来たが、変動